HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	林芙美子研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	姜, 銓鎬
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14147号
Issue Date	2020-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79319
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kang_Jeonho_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　姜　銓 鎬

主査　教　授　押　野　武　志
審査委員　副査　教　授　応　雄
副査　教　授　権　錫　永

学位論文題名
林芙美子研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、林芙美子の一部の代表作的作品から芙美子文学の特質を論じるのではなく、これまでの研究で注目されてこなかった作品群、あるいは、童話といった小説以外のジャンルにも注目し、初期・中期・後期という創作区分に基づいて作品の系列を整理しながら、総合的に分析したものである。このような分析を通して、芙美子文学に対する新たな読みを提示することに成功している。戦前から戦後にかけても通底する林芙美子文学の特質と、創作時期によって変容する語りの方法や女性表象を通時的に明らかにするという作品研究として、評価に価する。自伝的な「放浪記」以来、芙美子作品は、もっぱら私小説的な観点から論じられてきたが、そのような一人称小説のみならず、三人称視点の小説も論じることで、下層の女性に限定されない、女性表象の多様性や、詳細な作品の構造分析から、フィクションとしての小説の完成度を測定することができた。初期の洗練されていない文体が逆に評価されたりもするのであるが、本論文は、「浮雲」を頂点とする芙美子文学の小説的な達成度を再評価するものである。たとえば、後期の「盲目の詩」における、盲目の老女による一人称口語体の特質を初期の一人称小説や谷崎潤一郎の「盲目物語」などと比較しながら、芙美子文学における小説技法の特質を浮き彫りにする。

そのほか、代表作以外の作品分析においても、芙美子文学に対する新たな視座を提供している。戦時下に書かれた芙美子の中期作品は、従軍記を除けば従来ほとんど論じられていなかった。それに対して本論文は、初期作品と後期作品をつなぎ、芙美子文学の全体像を理解する上で、中期の作品群の重要性を指摘する。戦争協力という観点から批判的に論じられていた中期作品を、後期作品へと至る、新しい小説的な試みとして、具体的な作品分析を通して明らかにした。

さらに、宮本百合子や佐多稲子など同時代の日本の女性作家だけではなく、朝鮮人作家の崔明翊（チェミョンイク）との比較検討を通して、多様な作家たちのアジア認識や戦後日本に対する認識の共通性や相違点を新たな視点から捉え直す比較文学研究としても研究成果をあげている。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会において、上述の研究成果に関して概ね説得的に論証されており、芙美子文学の全体像に迫る学術研究であると判断した。

ただし、問題がないわけではない。代表作以外の芙美子文学を再評価しようとする視座は重要であるものの、そうした視座によって、作品を過度に評価し、主観的な分析になっている箇所が散見される。たとえば、「放浪記」以前の習作期といっていい時期に書かれた童話を論じた第一部において、既にそこに芙美子文学の原型が見出せると主張している。しかしながら、それらの童話は、芙美子のオリジナルな童話ではなく、種本は特定できないものの、海外の作品の翻案と思われる童話も含まれている。プロットの類似性には、芙美子文学に限定されない、物語の構造一般に還元されうる水準があることを考慮すべきである。また、戦争協力作品以外の作品を論じた第二部において、時局とは直接関わらない短篇小説の文体を論じ、中期における芙美子文学の手法の変容を論じたと

ころは、高く評価すべき点ではあるが、ほぼ同時期に、オリジナルな童話も芙美子は書いていたという点を看過している。こうした童話も含め、全集未収録の作品や論じられたことがない作品が多くある芙美子文学において、どの作品を再評価し、それをどのような形で芙美子文学の中に再定位するのか、さらなる展望が求められる。

また、芙美子文学の集大成と位置づける「浮雲」を論じた第三部においては、作品の構造分析に終始するあまり、同時代の言説との関連性が不十分であった。初期の作品との比較はしているが、「浮雲」とモチーフを共有する、引き揚げ体験や娼婦の表象など、内在的関連性のある同時代言説や他作品と比較する方が有効である。

しかし、このような問題点は、芙美子文学の特質とその可能性、および変容のプロセスを通時的に論じつつ、同時代言説との関連性や他作家との比較など多様な角度から再検討するという、本論文の対象領域の広さと射程の長さに由来するものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。今後、芙美子の論じられていない他作品の分析を通してそれらの課題は克服され、さらなる研究成果も期待される。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。